一冊の本に思いを込めた
国東で生きることの意義、本当の幸せ!!

安岐町成久で養鶏業を営む大熊良一さん（56歳）が、このほど“熊さんのトリ小屋通信”を出版し、全国の読者の皆さんから大きな共感を得ています。

この本は、10年間のサラリーマン生活に見切りをつけて、二十数年前に故郷で自然相手の農業に転職した大熊さんが、４年前の平成15年９月から朝日新聞の大分版にはじめた、連載「熊さんのトリ小屋通信」をまとめたもので、内容は農業のことにとどまらず自然環境や教育問題等実に多種多様です。大熊さんは、800羽の鶏の世話をする間も卵を配達する間も、寝ているとき以外は四六時中何を書こうかと文章のことを考えているそうです。

マラソンが趣味の大熊さんは、奥さんのみどりさんと、社会人となった息子さん、娘さんと80歳になる母親と５人暮らしです。奥さんのみどりさんは、大熊さんを評して「ひと口で言うとねばり強い人です。口に出したことは、必ずやりとげます。それがこの本に集約されていると思います。」

▲出版した本を持つ大熊さんと奥さんのみどりさん

大熊さんの話。「書いた原稿は、まず妻に読んでもらいます。市民の皆さんに、やる気があれば50歳を過ぎてもこんなことができるということを知ってほしいです。私は、このコラムを書くまでは、日記もつけたことがなかった人です。ある意味この本は、妻との共同作業で完成したようなものです。読者の方との出会いやふれあいも生まれたし、それが何よりの励みになります。充実したバリバリの50代をやってますよ。」

武蔵中学校三人娘　梅雨空を吹き飛ばし国東市内を走る
職場体験学習で市役所の仕事を体験

▲国見町農業公社の前田課長（右）に、農業についてのいろいろな話を聞きました

武蔵中学校２年２組の瀧口真由さん、相部桃子さん、藤原史歩さんの３人が、職場体験学習の一環として、７月17日㈫に国東市役所企画課広報公聴係で、一日取材活動に汗を流しました。

３人は、11日㈬から18日㈬までの５日間、職場体験学習として、武蔵総合支所や武蔵保健福祉センター等で体験学習を行いました。

17日は、市役所本庁内の職場を見学した後、安岐町で養鶏業を営む大熊良一さん宅で、取材を見学しました。午後は、国見町農業公社やくにみ海浜公園、国体推進室を取材しました。

職場体験で感じたこと

私は、国東町にある本庁へ来たのは初めてですが、支所より大きく、働いている人数もとても多く驚きました。また、安岐町の「トリ小屋通信」を書いている、大熊さんの取材を見学しました。こんな仕事もしているんだなあと思いました。

国見の農業公社では、農業の現状についてお話を伺いました。後継者ができないこと。しかし、その反面、水田に張った水が地域温暖化の悪化を遅らせる効果があるということを聞きました。また、「アストくにさき」では、来年行われる大分国体のことや参議院選挙の会場も見学させてもらいました。

市役所の仕事は範囲が広く、大変ですが、働いている方たちの頑張りで私たちは安定した生活を送れるんだなあと思いました。　（相部桃子）

初めての取材

午前中、安岐町の大熊さんの家に行き、企画課で働いている萱島さんと田川さんが取材をする。大熊さんは、今出版をしている「トリ小屋通信」という本を紹介していた。農業をしていて本を出すことはめずらしい。鶏を800羽飼っているそうだ。

午後は、国見農業公社を訪問し、前田課長にお話を伺った。前田課長の話。「現在、国見と安岐にしか農業公社はないが、将来は国東市内全域をカバーして農業を守っていけたらいいなあと思っています。」

次に、「アストくにさき」に行き見学をした。来年行われる大分国体では、アストくにさきがウエイトリフティングの会場になるという。私も、中学生として大会成功に向けて、自分たちのできる協力をしていきたい。　（瀧口真由）

感動した職場体験!!

私が、職場体験で一番心に残っていることは、国見農業公社へ取材に行ったことです。今、農業の後継者が減少しつつあるそうです。私は、生まれも育ちも田舎で、稲穂の揺れるのを見て大きくなったので、田んぼが減るのはとてもさびしいです。しかし、私の好きな田んぼを一生懸命守ろうとしている人たちがいることがわかって、少し安心しました。

私は、この職場体験を通して、たくさんのことを学ぶことができました。とても充実した職場体験ができたと思います。最後に、取材をさせていただいた方々、市役所の職員の皆さんありがとうございました。

（藤原史歩）